同窓会というもの

酒　井　為　久

1．この小論のねらい

この小論のねらいは，中学校および高等学校（中等教育）の同窓会というものと同窓会がもっている機能とについて検討を深めるための材料として，それらについての一つのモデルを提示することである。

本稿は，そのモデルの概略を記述したものである。

モデルというのは，名古屋大学教育学部附属中・高等学校同窓会のことである。戦後の昭和22年，新制中学発足時に創立された小規模母校の同窓会であることと，母校教官の異動がゆるやかであった歴史が，同窓会のモデル化に役立っている。

傍観者の立場から，このような中等教育校の同窓会を眺めるならば，次のように位置付けしうると思われる。即ち，同窓会というものは，当該中等教育校教育の総合的にして，かつ長期的影響のもとにある社会集団で，自然発生的な生涯教育の場になっている，と。

その一方で，誰もがすべてそれぞれ一同窓会員として経験している，私達の同窓会意識のなかの同窓会は，青春回顧や人脈確認の手段であり，同窓会のもつ意義を問うことなど試みる必要がない，思い出と等しいものと言い得る。

ところが，現実に同窓会という構造が機能して，いろいろに事業が推進されていく，その幹事部分に属して，同窓会事業と取り組んでいる立場の者は，「その意義について疑問を感じずにはいられないことが」よくある。

そういう疑問を「人さまざま，そして同窓会とのかかわり合いもさまざま」であるという個人生活の問題として解こうとした，「名古屋大学教育学部附属中・高等学校同窓会　母校創立25周年記念　名簿　1972」に記載されている，高橋みな子氏の「同窓会のことなど」には心から共感を覚えるものである。

同じ疑問について，私は，学校教育の問題としての側面から検討できないかとも考えながら，この小論を書いている。

2．同窓会というもの

同窓会というものは，たとえてみるならば，古典のような存在である。

古典がその国民性の象徴であるように，同窓会は同窓会員それぞれの学校時代に寄せる思いが集約された存在である。

古典が国民精神を方向付けることがあるように，同窓会が会員それぞれの考え方・生き方に影響を与えていくことがある。

古典に各種各様の作品があるように，同窓会にも各種各様のものがある筈だが，私達は，その中の一つにアプリオリのものとして帰属して疑わないのが普通である。

そして，その一つの古典作品を自ら遠ざけて読まない状態から，熟読玩味する状態など「いかにも日本的存在として，我々の周囲にその例を数多く見出す」のが普通である。

そうした読者の立場から離れ，形象のみ存在する一つの古典作品を伝承しようと努力する同窓会幹事部分の働きが生む，同窓会とは何かという疑問に，私なりに答えてみたい気持ちがある。

その線上に，同窓会の一つのモデルを提示できるならば，それが指標となって，各種各様の同窓会という古典作品の理解が容易となり，延いては中学校・高等学校教育の成果が古典作品化する仕組みも解明できるように思われる。

3．論述をすすめる立場

以下，断り書きのないところは，すべて本校同窓会についての記述である。

さて，同窓会の幹事部分というのは，同窓会が全体として過去向きの様相を示すなかで，何かを生み出し完結させようと前向きに機能して，同窓会活動全体を推進していく部分のことである。

高等教育関係では事務組織をもつ場合もあるが，初等教育関係では幹事部分そのものが見当らない場合もある。

本校の場合，同窓会事業が立案される度ごとに幹事部分が組織され，事業終了とともに一応の任務を終え解散することになっている。しかし，一学年２学級ないし３学級の小規模校同窓会であることから，その顔触れは似通ったものになっている。

事業というのは，「会員名簿の発行」昭和25年に附属中学校同窓会発足・昭和28年に附属高等学校同窓会発足・昭和32年に附属中高同窓会合同以来，９冊の名簿発行がその一つ。「同窓会の各種会合」を開催していることがその二つ。「母校関係の記念行事」を実施

してきたことがその三つである。

これらの事業に意義を認めて名乗りを上げたり，恩師から依頼されたりして幹事集団が成立するのであるが，幹事の仕事は徹底した奉仕精神の持ち主でないと勤まらないようだ。会員とはいうものの不特定多数を相手にし，何らの反対給付を受けることもなく，時間を忍耐強く消費し，自腹を切って事業を推進するのである。

ボランティア活動が，その社会的評価と人間的連帯をバネに推進されているのと比較すると，同窓会幹事活動は，学校時代をなつかしむ気持ちが拠り所となっており，本尊のない宗教運動に近いものがあると言えるようだ。

従って，仕事の拘束力は非常に弱く，事業達成への道がほど遠くなっている上に，足並みの不一致が起きる。そこでいわゆる指導力とか言うものを発揮してみると，事業全体が空中分解して無に帰してしまうのが落ちである。

以上のことを見越して成立している幹事集団が，同窓会を支えている。一つの事業が終了して，次の事業に移るとき，幹事集団から抜け出る人が出るのは人情の自然である。その穴埋めに，幹事にふさわしい人をと考えても，特殊な仕事の性質からして見当を付けることが容易でない。

教師の立場であるのを利用して，世話好きの生徒であったからと思い浮べ，幹事を依頼してみて，学校時代と卒業後とでは全く違うという経験を何度もしている。幹事には，宗教心のようなものと，他人を思いやる積極性とが必要なもののようである。

私は，昭和33年以来ずっと同窓会事業に関わってきて，一つの事業を終える度ごとに幹事部分から抜け出したいと思うのが常である。それは，余暇のすべてを使うほどであり，片手間では処理できない縁の下を支えるような活動からの解放感がそう思わせるのであった。

しかし，私が母校に勤めているということで，1回生・2回生の皆さんが，機会あるごとに格別に熱心に同窓会事業等を後援してくれているのに感激し，感謝するがため，役に立たないのは承知の上で，生活上の実利的なマイナス面には眼をつぶって，またこの仕事に取り組む次第の繰り返しである。

わが同窓会は，クラス会（学年会）が積み重なった連合構造であり，同窓会の幹事部分はクラス会を縦に束ねる役目を果している。

4．教育効果の長期的測定

最近の大事業は「創立40周年　同窓会名簿　1987」の発行事業である。

昭和61年4月から準備作業に入り，昭和62年1月には仕事が軌道に乗り，昭和62年10月発行の後，配布作業・資金集約作業が昭和63年4月までかかった。

満2ケ年の事業である。「1年有余の期間，旧交をあたためる電話連絡や音信不通の同級生との出合いなど，親睦活動が随時随所に繰り返され，恩師を囲んだクラス会もあちこちで開かれ」ていた。この親睦活動というのが，わが同窓会の主骨をなしているので，名簿発行作業をビジネスとして実施するのでなく，親睦活動の過程が名簿という形になるよう時間をかけるのである。

とはいうものの，資金計画のようなものは責任をもって集中して立案実施しなければならないのである。予算があっての事業でなく，収入活動も事業の柱の一つとなる。

一般に，寄附に頼る方法があるが，わが同窓会の特色は「会員各位が同等に温かな心をもって，附属が養ってくれたものをなつかしみ，それを卒業後も各自で育て続けているところに存在して」いるという点なので，名簿販売を資金源とする全会員実費依存の方法をとっている。よって，販売できる数について孤独な状況で予測決定する必要等が生じてくる。

また，広告掲載による方法もあるが，これは収入量以上に見かけの点で統一を欠き，会全体のまとまりが疑われがちなことと，郵送料の負担が増すことから採用しないでいる。

結果として，収入550万円程・支出450万円程，同窓会事業の特質から言って，出入り合計約 1,000万円の事業となった。直接，携わった人員，ここで言うところの幹事部分は約50名である。

発行できた「創立40周年　名簿」は，小規模中等教育研究校の教育効果を長期的に測定できる資料として最高のものと考えたい。

個々の生徒が卒業後，どういう高等教育や専門教育や就職の道へ進んだか，その後，どんな人生航路にあるかという記録として，唯一の貴重品であるのは言うまでもない。教育の楽しみは，教え子の成長を認めることであり，それが卒業後も継続しているのを知ることは無上のものである。

中等教育校の教育効果を短期的に測定する方法として，上級学校への進学率や一流企業への就職率を目安としている意味においても，名簿はその価値を発揮している。

そういう利用法の他に，卒業生徒の側で卒業校の教育全般をどう受けとめているかを測定する手段としての利用法がある。

同窓意識というものを，長期的な教育効果測定に使用するのである。

本校同窓会概略表

昭和63年3月1日現在

	会員数	内訳 男	内訳 女	同窓意識指数	住所不明比率	備考
1 回生	126	75	51	55	0	22年5月中学1回生入学
2 回生	146	85	61	54	1	25年4月高校1回生入学
3 回生	83	43	40	40	13	ここまで完全に豊川
4 回生	98	53	45	37	7	
5 回生	139	82	57	38	7	
6 回生	125	78	47	37	13	
7 回生	119	72	47	45	9	ここから完全に東芳野町
8 回生	132	73	59	37	5	
9 回生	129	71	58	42	2	
10 回生	128	67	61	29	11	
11 回生	120	66	54	30	11	ここまで完全に東芳野町
12 回生	112	63	49	44	7	
13 回生	119	68	51	45	8	
14 回生	113	66	47	50	2	
15 回生	116	65	51	42	3	ここまで中高とも1学年2学級
16 回生	152	92	60	29	24	ここから1学年中2学級、高3学級となる
17 回生	165	105	60	40	12	
18 回生	163	102	61	48	7	ここから完全に東山
19 回生	160	96	64	38	18	
20 回生	153	92	61	38	0	
21 回生	151	91	60	36	12	
22 回生	149	84	65	44	1	
23 回生	144	73	71	38	3	
24 回生	146	90	56	39	8	県下公立高校学校群制導入
25 回生	147	87	60	45	9	
26 回生	140	75	65	46	3	
27 回生	141	69	72	45	1	共通一次試験始まる
28 回生	144	79	65	40	3	
29 回生	142	80	62	49	3	
30 回生	138	59	79	40	4	
31 回生	139	60	79	39	1	
32 回生	147	74	73	44	3	
33 回生	143	73	70	41	4	本校高卒者の大学受験の変異明確となる
34 回生	154	74	80	42	1	
35 回生	138	68	70	25	4	国公立大学入試AB日程始まる
合計（平均）	4,761	2,650	2,111	(41)	(6)	63年3月高校卒業生は36回生（145名）

前頁の表中に，「同窓意識指数」としたのは，各回次ごとの今回の名簿購入者の比率に多少の補正を加えたものである。40周年名簿に対する積極的協力が個々の会員のとらわれない判断によって行われたということを，当事者による母校教育の時間をかけた上での評価の結果であると考えたい。

名簿発行の前に購入希望を個々に募り，郵便振替で代金を自発的に振り込んだ会員に名簿を発送する作業から生れた，同窓意識指数の一覧を，どう読むかについては各自にまかせたいが，お互いが自信のもてる数値となっている。

同窓意識の生成とか実態とかの分析や集積は手に余ることなので，便宜的な手段ではあるが，こうしたものの利用が手取り早い。

比較対照すべき，他校同窓会の同様な資料に目を通したいと願っている。

前頁に掲げた表中の，「住所不明比率」は，二三の回次を除くと，同窓会名簿印刷の専門業者が完璧に近いものだと大鼓判を押してくれた数値である。

各回次の横のまとまりと各回次の幹事部分の働きの結果であるが，わが同窓会が，各回ごとの友情のまとまりや同年度クラス会活動の結び付きの強さを，無理なく積み重ねた家庭的な連合構造であることの証明にもなっている。

それぞれの回次の会員間には，母校に関係ある共通の話題があって，同窓同年意識を顕在化させている。この共通話題については，アンケート調査ができそうであるが，今はその傾向のみを記すと，その一は，先生にまつわる学習活動のこと。その二は，同級生と過ごした学校生活のこと。この二種にまとめることができよう。

そして，附属中・高という理想郷において，純粋な気持ちから生まれた友情が主役の座に付く筈と推定できる。

そうした共通話題がありながら，クラス会を頻繁に開く回次とほとんど開かない回次とがある。その理由は，前頁の表中の，「備考」に一部分記したような各回次の成立条件の違いが一つである。二つ目は，各回次の幹事部分が未成立の回次から始って，献身的に機能している回次までが存在することである。第三は，その回次と結び付きの強い先生がいるかいないかの差が出ているようである。

クラス会をよく開く回次が，住所不明比率が低いのは当然である。それと，卒業後の年数が多くなるにつれて，「会員の拠り所が，それぞれに年輪を重ねている同窓生の集合体へ向いていくという，意識の変化がみられるように」なってきて，回次のまとまりがよくなることもある。

クラス会が卒業生全員のものであるには，また，全員のものに近づけるためには，学校時代が隅々まで友情を育てる場であったかどうかに決定力がある。本校の場合，比較的に地縁の結び付きが薄い生徒集団であるにもかかわらず，同学年の横のまとまりのよい卒業回次があるのは，小規模研究校の長所が出たものであろう。

5．本校同窓会のこれから

本校同窓会の特徴を列挙してみよう。

1．回次ごとの活動を基本として，その連合構造の形態をなしていること。

2．個々の会員は，男女の別なく，社会生活上の位置に関係なく，同等で，全員がそれぞれに懐いている同窓意識に従って，自由自主的に帰属していること。

3．同窓会の機能の中心に位置している，同窓会幹事部分もまた自由自主的に構成された，柔らかい組織ながら小規模同窓会のため，適度の継続性を兼ね具えていること。

4．これまでの活動内容を一語で表すならば，親睦主義の同窓会であると言え，各回次の足並みを揃える必要がほとんどなく，それぞれの行き方を包み込んで，自然な状態に保つところがあること。

5．事業と言っても，会合や行事の開催と名簿発行だけであったが，定期的に程よい間合いで行われる事業に協力する会員の，小規模母校愛とか友情によく支えられている同窓会であること。

以上である。

中等教育校の同窓会のあるものは，学校の校務分掌の一部分に組み込まれた事務局主導型になっており，教育ビジネス活動の一環を担った位置を占めている。人口移動が多い大都会にある中等教育校の同窓会のあるものは，有名無実型になっており，活動を停止している。

それを思うと，わが同窓会は生きており，独自の道を歩いている。同窓会というもののモデル的な在り方を開拓してきたと言ってよい。

昭和32年から実施されている本校の「同窓会規約」は，あらゆるケースを想定した落ちのない内容で，戦前からの同窓会というものの伝統を本校に合うようアレンジした規約だと思われる。

その規約内容で，現在適用されていない部分がかなりある。爾来30年にわたる同窓会活動は，規約の該当部分のみによって推進されてきた。

その間，高等学校の準義務教育化，高等教育の大衆化に伴う中等教育の変貌等の流れの中で，本校は，豊川市から名古屋市への移転，名古屋市内での移転，そして，入学選抜方法の変更等の動きを記録してきた。

それらが同窓会活動に反映して，規約通りにいかない面がある。

これからの本校同窓会を考えるとき，他校同窓会のいくつかが事務局主導型や有名無実型であるように，その方向へ進む可能性もなきにしもあらずと思われるが，わが同窓会が中等教育の教育効果を測定できるような場であることと，表で示したように「同窓意識」が世代による質的変化が大きいのは当然であるものの，量的にはさほど変動していない状況とから判断して，本校教育がこれまでの行き方を続けていくかぎり，同窓会も今まで通りであるに違いないと落ち着く。

教師の一員として，教育の重みを感じながら次のように見通しをたてている。本校同窓会は，これからも「従来どおり親睦活動によってお互いの力を養っていく一方」，例をあげれば同窓会としての顕彰活動や互助活動を付け加えて，これまで与えてもらったものを，今度は還元していく務めを果たし，それが「母校の実質的な後援となり，謝恩の道となっていくよう」な方向へ歩むだろう。

昭和22年以来，母校を取り巻く社会的諸条件の変化の大きさは言うに及ばず，母校そのものも，海のものとも山のものとも分らなかった草創期。やっとここまで到達した安堵感が充満した創立10周年期。何か自分達の手で築き上げたものをよろこび合った創立20周年期。故郷の山河というにふさわしい様相を呈してきた創立30周年期。自然開発の波が押し寄せていろいろな課題が生じている創立40周年期，と移り変ってきた。

それらを反映して年輪を重ねてきた本校同窓会，その新しい記念事業を期待する声が聞こえ始めた。

6．補　説

1．同窓会の「幹事部分」という表現は，この小論においてのみ使用したもので，本校同窓会の通常の呼称は「役員・委員」である。

「幹事部分」を使用したのは，本校同窓会構造の自律性とその機能の自発性とを印象づけるためであり，本校同窓会構造の中心に位置し，その機能の推進力であることを強調するためである。

2．第1節と第2節の「　」中の引用文は，本校同窓会　25周年名簿に記載の高橋みな子氏（本校同窓会第2回生）のもの。

3．第4節と第5節の「　」中の引用文は，本校同窓会　40周年名簿に記載の筆者酒井為久（昭和63年1月から本校同窓会長　第1回生）のもの。

4．第5節の規約関係について，「同窓会に関する調査報告書」愛知県立旭丘高等学校同窓会　昭和45年3月の小冊子は，県下49高校の調査結果をまとめたもので参考になる。

5．なお，「名古屋大学教育学部附属中・高等学校同窓会　40周年名簿　1987」をご請求の上，ご参照いただければ幸である。